夢の住人

ナナシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の住人

【Ｎコード】
Ｎ０６５５Ｄ

【作者名】
ナナシキ

【あらすじ】
夢の住人、神薙は様々な夢に出会います。彼女の夢を見た人々は、必ず何かを心に残すと言います。この小説は連作短編形式をとっています。

一夢　菅井電気

＜プロローグ＞

ここがどこかと聞かれたらすぐに答えることができる
だが私が誰かと聞かれたら、、、なんと答えればいいのだろう
真名だってすでに忘れてしまった
だから今では別の名前をつかっている
そしてその名前はいつも不思議な響きがする
どこかで、ひっかかるのは
おそらく昔の記憶と関係あるのだろう

昔
昔、、、
どうしても思い出せない
私は何なのだろう
気がついたときにはこの街にいた私
昔の記憶はないが今では過去となった生活があったことは分かる

ただ自分のできることと言ったら、、そう
そしてこの街は

＊＊＊＊＊＊＊

ここは幾千の旅人が流れる街

＊＊＊＊＊＊＊

今日はいい日だ、、

なぜなら

彼女ができたし、給料ももらえたからだ

ゴミが見事にクズカゴインしたし、、

ん〜〜

男はなんでも分析したがるって聞いたことあるけど本当かな〜

理系だからか？

まあいいか。

「やあ、よく来たね。」

「ん？あんた誰だ？」

「私は神薙、君は坂井　勝君だっけ？」

「ああ、、」

こいつ何もんだ？なんで俺の名前知ってるんだ？

「なんていうか、俺に用ある？」

「別に」

クールにきめてくるね～。涼しい目なんかしちゃって

「ただ、あんた嘘ついてない？」

ビクッってきた、

こいつ俺のこと何か知ってんのか

「あんたにゃ関係ないだろ、

それに俺は今、幸せだ」

「関係なくは無い、私はあんたが不機嫌なせいで存分に居心地が悪いだよ。」

「な、な、、、」

「まあいい、そんなことより君のこと聞かせてくれないか？」

何をいってるんだ？俺のこと、、、？

「いいぜ、こんなつまんない奴の話でよけりゃ聞かせてやるよ」

何言ってるんだよ、俺。

いくら相手がこう、、スラッとした美人だからって

＊＊＊＊＊＊＊

この街には様々な人が訪れる。

＊＊＊＊＊＊＊

俺の話をしよう。

俺は坂井勝、１９才。一浪して晴れて大学生になれた。

昔から機械いじりが好きで、工学部にいる。

ただただ、自分の手でいろいろなものが作れることが楽しかった。

自分の作ったものがみんなが使ってくれたらどんなにいいか。

そんな夢を見ていたこともある。

だから今は満たされているはずなんだ・・・。

何も迷うことはない・・・。

なのに、心に穴が開いてる。

楽しくてもいつの間にかすきま風が吹いているんだ。

＊＊＊＊＊＊＊

人々は、さまよいながらも

＊＊＊＊＊＊＊

１８才の時、志望大学から落ちた俺は浪人生になった。

落ち込みはしたが、いつまでもそうしているわけにも行かず、バイトしながら予備校に通うことになった。

親父からは「お前にそんな大学は無理だ、就職でもなんでもしろ！」って怒鳴られちまった。

怒った俺も家を飛び出したわけだが、しっかり仕送りは送ってくれた。

俺はありがたくって、情けなくって、なるべく使わないように気を

つけたんだが、
結局少しずつ消えていった。

だが、慣れない浪人もなかなか捨てたモノでもない。
こんな俺でも支えてくれてる人がいる思うとがんばれたから。

家族

友達

それから千鶴

彼女が俺を変えてくれたんだ。

高三の時、特に何も無かった俺を、別の世界へつれていってくれた。
それはとても楽しい日々だった。

＊＊＊＊＊＊＊

出会い

＊＊＊＊＊＊＊

彼女の名前は菅井　千鶴。菅井電気ていう小さな町工場の娘でもあった。

馴れ初めは、俺がコンビニでバイトしだして千鶴とよく会っていたので、話をしている内に、、、な。

まあ千鶴とは学校が同じだけど、彼女は英語科だから話したことがなかったんだ。
それがつき合いだすと千鶴はいつも視界の中にいる。
今まで見えてなかったのが嘘のようだ。

千鶴が菅井電気の娘って聞いたときはびっくりしたっけ。

俺がへんてこなもの作っては二人で笑ったっけ

そうして俺達は一つの約束をした。

「絶対、同じ大学に行こうね」って

その大学は国際的な活動をうたい文句にしていて、工学部も、英語科もそろっている国公立の大学だった。
偏差値３０台の俺は無理だって言ったけど千鶴の熱意に負けた。

それから俺は必死に勉強した。寝る間も惜しんで彼女との大学生活に憧れた。

だけど全てはうまくはいかないものだ。

大学はすべった、

俺は、自暴自棄になったが千鶴は支えてくれた。

「大丈夫。待ってるから」

おかげで落ち着いてくると、変な話だが、余裕が出てきたんだ。

高校の時は必死だったからその反動かな？
たぶん、彼女と勉強時間もよかったけどもっと彼女と自由に接することができるようになったからだと思う。

あと菅井電気でバイトさせてもらっていうのも大きいかな？
やっぱり生で機械触れるのはモチベーションも上がるし、彼女にも会える。

そうやって幸せな日々は過ぎていった。

＊＊＊＊＊＊＊

憩う

＊＊＊＊＊＊＊

やがて俺の学力もつき、センター試験の結果でA判定をもらい、菅井電気でも認められるようになった頃、

千鶴は

事故に遭った。

千鶴は飛び出した子供を助けようとして引かれたらしい。

と言っても

一日入院しただけですぐ退院できた。

退院した次の日は千鶴の誕生日だったんだ。

だから思いっきり祝ってやろと、でっかいケーキと前から欲しがってたプレゼントを用意してパーティーを始めたんだ。

千鶴めちゃくちゃ喜んでたっけ。

で、ケーキにたてるロウソク忘れたんで席を立つと
千鶴がなんか変なこと言ったんだよ。
俺は笑って頷いてからロウソク取りに言って

戻ってみると

千鶴が倒れてるんだよ。

俺もう何がなんだかわからなくてな。
ただ、すぐに病院行ったけど手遅れだった

葬式終わった後も何も出来なかった。
虚無感っていうのかな？何にも無くなっちまった。

＊＊＊＊＊＊＊

そんな日々にも、いつかは別れが訪れ

＊＊＊＊＊＊＊

俺はよく千鶴と来た土手でボーとしていることがあった。
大学の試験の日もそうなるかと思ったら、友達が来てくれて
「彼女のためにも行ってこい」って説得された。

俺もいい友達もったな。

その後も友達に連れ回されたおかげで少しは明るくなれた。

千鶴の居ない大学なんて、ってやっぱりくさってた俺を、
合格発表の日もついてってくれて合格を一緒に喜んでくれた。

友達の薦めで彼女もできた。

な、
今は幸せのはずだろ？
な？

俺は幸せだよな？
な？

＊＊＊＊＊＊＊

名残惜しみながらも

＊＊＊＊＊＊＊

「なるほど君の話しは分かったわ」

「そうか、楽しかったか？俺もすっきりしたさ・・・幸せもんだからな」

「なら何で泣いているの？」

？

あれ？

えっ

俺は頬に手を当てると確かに濡れていた、下をみると水滴が落ちていた

「なんでかな？止まんねぇんだ」

「それは君が嘘をついてるから。
傷は隠しても膿んでしまうわ、ちゃんと向き合って治していかないと」

「てめぇに何がわかるって言うんだよ！！！そう簡単に千鶴を消せるか！！千鶴は俺の全てだったんだ！！千鶴は・・」

俺は怒りに任せて怒鳴り散らした。
悲しいし悔しいし辛いし自分でもよくわからないけど、全ての感情を怒りにしてぶつけた。

神薙はしばらく怒りを受け止めてくれたかと思うと、近づいてきた

フワッ

何か暖かいものに包まれる

「もう大丈夫だから」

くそ

くそ

「くそ――――――！！！」

＊＊＊＊＊＊＊

旅立っていく

＊＊＊＊＊＊＊

「あんたヅルイよ、あんなことされたら甘えちまうよ」

俺は神薙の抱擁から離れてからそう言い放った

「君があまりにも辛そうだったから」

俺は神薙を見ながら、こんなやさしそうな顔できるんだなぁと思った。

「あんた、本当になにもんだよ」

今度は本当に心がすんできた、

傷をさらして少しは膿が出たかな？

「私は神薙、この夢の街の住人だ。」

「・・・？

ここは夢だっていうのか？」

「ああ、

人は自分の中にいくつもの自分が住んでいる。だがその全てが自分

でもあし、一部でもある。
夢はそんな自分の影のような者達が暮らす場所でもある。
そしてここは特に様々な人の影が入り乱れる街。」

「夢の世界、その中の街の一つか」

「ああ、ところで元気は出たか」

「少しは、スキッキリしたかな」

「よかった、、、そうだ。最後にいいことを教えてやろう。
千鶴の最後の誕生日覚えているか」

今では思い起こすこともしないようにしていたが、案外自然とできた。

「いや、正直全部が全部は覚えてないんだ。あの時が衝撃的たせいか断片的にしか。

ただ今になってみて、あれは奇跡みたいなものだったと気づいたよ。
なのに俺は最期の言葉を覚えてないんだ。
我ながらバカだと思うよ」

「実はあの事故の時、千鶴は偶然この街を訪れ、私にお願いしてきたことがあるの。
君ににどうしても伝えたいことがあるってね。
何かって聞いたら
『あなたと一緒にいる時間はとても輝いていたわ。

それに、あなたががんばる姿見ると、私もがんばれた。
あなたはいつも私に力を与えてくれる。いいえ、私だけじゃない、
あなたを見た人はみんな力をもらったわ。
だからあなたはそのままでいて。
辛くなったなら、空を見上げて。私はいつでもあなたを見守っている
今までありがとう』
だって。
及ばずながら私は彼女に力を貸したわ」

「千鶴・・・・」

いつだって、俺が自分以上にがんばれたのは千鶴がいたからだ。

涙が止まらない。
今日は泣いてばっかりだな。
でも千鶴のおかげでがんばれる力が湧いてきた。天を仰げば千鶴がいる

＊＊＊＊＊＊＊

そんな旅人達にたむけの言葉を

＊＊＊＊＊＊＊

＜エピローグ＞

勝は目が覚めたとき涙を流していた。

朝日がカーテンをすり抜け、布団から上半身を起こした勝を暖かく包んでいる。
最初は、その朝日を見つめながらも自分が何をしているのか分からない。
なぜか胸が焦がれるほど疼き、いつの間にか前にある布団に顔を埋めていた。

そのとき自分が泣いているのだと悟った。
どこか冷静な自分が俺は何をやってるんだと尋ねるが何も分からない。
何が悲しいのだろう？
いや、悲しいと言うよりも何か暖かくも懐かしく、離れてしまって寂しいのだろうか、、、
不意にさっきと比べものにならない衝動が巻き起こり、
勝は布団をかき抱いた。
止めめど無く荒れ狂う感情の本流の中で勝の出来ることといいたら、ただただ、嗚咽を垂れ流し、枕に顔を伏せることしかできない。

あの夢は何だったのだろうか？
今でもふいに思い出したいと思うときが来るのだがどうしても出来ない。
思い出すのは目覚めたときの不思議な、、、それでいて決して嫌ではないあの感覚のみ。

でも確かにあのときから俺は変われたと思う。
何が変わったと言われても困るけど、

「いつもと同じ日常がいつもよりのどかに流れるような感覚」

言ってみるならばたったそれだけなのだ。
それだけなのだが、、
ああ、
俺は今、幸せだ。

一夢　菅井電気（後書き）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは幾千の旅人が流れる街

この街には様々な人が訪れる。

人々は、さまよいながらも

出会い

憩う

そんな日々にも、いつかは別れが訪れ

名残惜しみながらも

旅立っていく

そんな旅人達にたむけの言葉を

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

２００５年　２月０５日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0655d/

夢の住人

2010年10月8日13時21分発行